

「異質性」に関する一考察

「みんなちがって、みんないい」という言説をめぐって

前田尚子*

An Analysis of “Heterogeneity” : Concerning the Discourse of “Minna chigatte , Minna ii”

MAEDA Naoko*

Abstract

It is frequently said that the Japanese people have not been able to establish positive relationships with other ethnic peoples while accepting the many differences that exist among peoples of different social and cultural backgrounds. On the basis of this view, a number of researchers have criticized Japan's assimilative policy and the Japanese way of communicating, and have produced a brand of discourse that encourages individuals to know and respect the diversity between Japanese and other cultures .

The intent of this paper is to critically examine, using the concept of Constructionism, the views of discourse dealing with heterogeneity. For that purpose, I examine how the concept of “the self” is argued within the discourse on heterogeneity, and how individuals' selves (realities) are constructed through the acceptance of this particular discussion.

I will show that the current discourse on heterogeneity advises people to have such self-images as to be themselves and to be conscious of their own characters, as well as to be relativistic and to respect others equally. These points of views on heterogeneity appear to be rationalized on the grounds that they attempt to harmonize these two specific types of self-image.

In addition, I will point out the limitations of the current discourse on heterogeneity. The discussion itself cannot avoid the systemic way of thinking that allows individuals to pursue self-image to be themselves and conscious of their own characters while harmonizing the efforts to be relativistic and respectful of others equally, even though there is an assumption that people can attain the first of these self-images by themselves. The discussions concerning heterogeneity are in error since they include the assumption that individuals' complementary roles in their systems are a result of self-determination.

Finally, I will describe the occurrence of two paradoxes that arise as a direct consequence of the inaccuracy of these assumptions. The more eagerly individuals pursue their authenticities by themselves, the more tightly they are bound to one of the complementary roles within their systems. Furthermore, the more strongly they emphasize the differences or boundaries between themselves and others, the more they fail to

* 神田外語大学非常勤講師

recognize that they themselves are the parties concerned in the construction of mutual selves (realities) As a final result, individuals develop an attitude called “the denial of coevalness”.

1. はじめに

「わたしと小鳥とすずと」

わたしが両手をひろげても、
お空はちっともとべないが、
とべる小鳥はわたしのよう、
地面をはやくは走れない。

わたしがからだをゆすっても、
きれいな音はでないけど、
あの鳴るすずはわたしのよう
たくさんうたは知らないよ。

すずと、小鳥と、それからわたし、
みんなちがって、みんないい。

これは、童謡詩人・金子みすゞの「わたしと小鳥とすずと」という詩である¹⁾。この作品は、小学校3年生の「国語」の教科書(光村図書)にも掲載され、これまでに多くの子どもたちの目に触れてきた。また、2003年は金子生誕100年の節目にあたり、舞台、テレビドラマ、映画、書籍などのメディアを通して、人々の金子への関心も高まっている。

さて、私がこの童謡に注目したのは、まず、金子その人や彼女の作品そのものへの関心による。だが、それ以上に気にかかるのは、没後70年以上を経た今日になっても、多くの人々が金子の詩を取り上げ、再評価しようと試みている点である。たとえば、長年の探求の末、金子の遺稿集を探しあてた矢崎(1984/2003: 159-160)は、金子の作品を、次のように称えている。

「すずと、小鳥と、それからわたし、みんなちがって、みんないい」とうたうみすゞ

の心のいのりが、だれの心にも、やさしく、あたたかくひびいてくるでしょう。みすゞの童謡は、小さいもの、力の弱いもの、無名なもの、無用なもの、この地球という星に存在する、すべてのものに対する、いのりのうただったのです。

一方、作家の早坂暁(2003)は、「詩はずっと人間の視点だけで作られてきたが、金子みすゞさんは魚や花の視点を持ち込んだのです。革命だよ、大発明だよ、天才だよ。」と述べ、彼女の自己(人間)中心的な視点からの脱却を評価している。

このように、「ちがい」について語る金子の詩は、時を経て、さまざまな人々の間で反復され、肯定的に語り直されている。さて、本稿では、こうした再評価を含めた「ちがい」にまつわる語りを、一種の「言説」として捉えていきたい(「言説」については、第3節を参照)。その上で、次の三点について考察を進めていく。すなわち、人々は、「ちがい」をめぐってどのような語りを展開してきたのか、また、そうした語りは、それらを受け入れる人々にどのような影響を与えてきたのか、そして、「ちがい」を尊ぶ今日の日本社会の傾向に問題があるとすれば、それは何なのか、ということである。

これら三つの問いは、「自己」の構成ということと関連させて考えることができる。「ちがい」について語ること、それは、金子が「小鳥」と「わたし」と「すず」に意味(定義)を与えたように、人々が自らに自己の定義を与えることを可能にする。言い換えれば、「ちがい」を語ることは、人々が何

らかの主体として構成される過程に関わりをもつことを意味する。この点を踏まえると、第一と第二の問いは、次のように書き換えることができる。すなわち、「ちがい」に関する語りのなかで、人々の自己はどのように語られてきたのか。また、それらの語りの受容を通して、人々はどのような主体として構成されてきたのか。そして、これら二つの問いへの考察を通して、第三に、語りの流通によってもたらされる問題点（自己形成における問題点）について、検討することが可能となる。

近年、日本社会に住む人々は、この社会にさまざまな「異質な人々」が存在することに気づくようになってきた。また、「異質性」への気づきを、必要かつ重要なものとして捉える傾向にある²⁾。金子の「みんなちがって、みんないい」という言葉が反復され、称揚される背景には、こうした今日的な事情が関わっていると思われる。だが、無防備な「ちがい」の称揚には、何ら問題はないのだろうか。本稿は、「ちがい」の合唱のなかで、見落とされがちな問題点に焦点をあてることを目的としている。

2. 本稿の意義

上記のように、本稿では、「ちがい」に関する語りを、自己形成を促す言説として捉え、また、その語りの分析を通して、日本社会における主体構築の一端に迫りたいと考えている。では、なぜこのような試みが必要なのだろうか。「ちがい」や「異質性」に関する議論の日本社会における流通のあり方を以下に示しながら、その理由を述べていきたい。

このところ、「ちがい」や「異質性」をめ

ぐっては、次のような二種類の議論をよく目にする。一つは、日本社会における人と人との関わりを研究対象とする（異文化）コミュニケーション研究である。それらの研究の主張を要約すると、以下のようになる。すなわち、これまでの日本社会では、自分と相手との「一体感」や「同質性」（たとえば、文化的同質性）を無自覚に前提とするコミュニケーションがなされてきた。この方法は、同質的な日本人どうしのコミュニケーションにおいては問題を生じないが、「異文化コミュニケーション」が頻繁に発生する今日では、もはや頼ることはできない。今後は、「異質なもの」を、異質のまま受け入れ理解する姿勢が求められる、というものである³⁾。

二つ目の議論は、国民国家による同一化の暴力を批判する国民国家論や、「日本人」の文化的同一性の表象に疑問を投げかける日本文化論批判、そして、他者表象における暴力を告発するポストコロニアル批評⁴⁾などである。これら三つの理論は、次のような共通点をもっている。一つは、近代国民国家の枠組みのなかで機能してきた、従来からの文化的アイデンティティのあり方を批判すること。そして、もう一つは、その文化的アイデンティティを支える植民地主義的な表象の機制を、問い直すことである。たとえば、戴（1999/2001）は、国民国家の枠組みのなかで形成された「日本人」というナショナル・アイデンティティを、二つの点から批判する。一つは、「エスニシティのヒエラルキーの問題」である。戴は、この文化的アイデンティティが、「普遍的な「アメリカ文明」を体現する「白人系アメリカ人」の優越性の神話と、否定的に表

象された「アジア人」というカテゴリーと対置されるなかで、形成されてきたことを指摘している。もう一つは、「『均質な日本人』という神話の問題」である。このアイデンティティのもと、日本社会の構成員（「日本民族」に属すとみなされる人々、そのようにみなされない人々を含め）の間にある異質性や多様性、各個人のなかにある雑種性が否定され、抑圧されることが問題視されている。

さて、上記の二つの議論で論じられていることは、いずれも説得力をもつようにみえる。だが、以下の点において、これら二つの議論を無条件に受け入れることはできない。

まず、前者の議論は、自分と相手との「同質性」を自明視した日本人の異文化コミュニケーションを批判する。多くの研究は、相手の「異質性」を認識することの大切さを啓蒙し、具体的にどのように振る舞うべきかを示そうとしている。だが、それらの議論には、次のような考察が欠落している。それは、自らの議論を自ら批判的に振り返るという作業である。具体的には、「ちがい」や「異質性」に対して、自分たちはどのように構え、捉えようとしているのか、また、そうした構えのもとに生み出される語りが、人々にどのような影響を与えているのか、といった検討がなされてこなかった。批判的な作業を欠くことにより、今日では、「ちがい」や「異質性」に対するある特定の構えが、あたかも自明なものであるかのように流通している。

一方、後者の議論に関しては、上野（2001:469）が次のような指摘をしている。「『国民国家』論は、（中略）日本の他の知の

流行と同じく、その概念が十分に咀嚼され成熟しないうちに、またたくうちに飽きられた」と。その原因はどこにあるのだろうか⁵⁾。原因の一つとして、私は、「日本人」として表象されることに何の違和も苦痛も感じることのない日本社会における大多数の人々（一般的に、「マジョリティ」と呼ばれる人々）の躊躇について触れたい。

よく知られるように、国民国家論のような既述の批判の多くは、「マイノリティ」と呼ばれる人々（いわば、「日本人」というカテゴリーへの同化の強制によって、違和や苦痛を与えられてきた人々）によって営まれてきた。そのため、一部の欺瞞的な振る舞いを除けば⁶⁾、いわゆるマジョリティによって、国民国家論などのパラダイムに自らを同一化させることは、容易なことではないと推測される。むしろ、多くのマジョリティは、これらのパラダイムへの安易な同一化に、どこかで困難を感じてきたのではないだろうか。「特権を享受してきたマジョリティの自分に、語る資格はない」といった躊躇や、稲賀（2000:7）も述べるように「当事者ではない、との理由から発言を謹む姿勢」は、その具体的な現れではないだろうか。

このように二つの議論の日本社会における流通のあり方に注目するかぎり、「ちがい」「異質性」についての語りは、かならずしも成功しているとは言えない。これに対して、本稿では、これら二つの議論の抱える問題を、関連づけて考察したい。すなわち、後者の議論への人々の躊躇は、前者の議論におけるような、「異質性」へのある特定の構えによってもたらされるものではないか、とみなすのである。言い換えれば、後者の

議論をまさにそのように経験する主体は、前者のような構えをもつ言説の受容によってもたらされるのではないかと考えるのである。この仮定に基づくならば、「ちがひ」や「異質性」に対する人々の構えにメスを入れないかぎり、「異質性」に向き合うためのあらたな自己の形成はなされない、ということになる。

「異質性」に関する語りにおいては、単に、「異質性」への認識や尊重の大切さを説くだけでは不十分ではないだろうか。そればかりか、その姿勢は、むしろ弊害をもたらすと考えられる。したがって、「異質性」がどのように捉えられてきたのかという点への注視が不可欠なのであり、本稿に意義があるとすれば、そうした凝視を怠っていない点にある。以下では、上記の仮定（「異質性」に対する特定の構えをもつ言説と主体形成との関係）を跡づけることを通して、日本社会における主体構築のあり様を問い直していきたい。

3. 本稿におけるアプローチ

本節では、言説と主体形成との関わりについて整理していく。すなわち、なぜ言説に注目し、言説の分析を通して、主体の構築について明らかにしようとするのかを、「構築主義」と呼ばれるアプローチに基づき説明していくこととする。

1) 「構築主義」の特徴 言語による世界の構築

パー（1997/2002:4）によると、心理学の領域における構築主義の特徴の一つは、従来の「世界」を理解する仕方 「世界のありのまま」は観察によって明らかにされ、

存在するものはわれわれが存在すると＜知覚する＞ものにほかならない」という考え方 に対して、批判的スタンスをとる点にある、という。その際、カギとなるのが、「言語」の捉え方における変化である。

それまでの伝統的な心理学では、世界は、人間の周りに客観的に存在するものとみなされてきた。また、人間は、言語を媒体とすることによって、周りの世界を認識することができるとの考えに基づいてきたという。つまり、言語は、世界のなかに実在する物事を、ありのままに表現・伝達するための単なる手段とみなされてきたのである。これに対して、パーは、言語に先立ち世界が存在するという捉え方を改め、人間は言語を通じてはじめて、世界をそのような構造と意味をもつものとして知覚することができると思う。言い換えれば、人は、言語によって経験可能なものを世界と呼んでいるのであって、その言語のもつ構造（記号体系）によって、自分の経験を切り分け、意味を見出すことが可能になるというのである。

この見方は、シンボリック相互作用論における相互作用の捉え方と親和的である。ブルーマー（1991/1995:2）は、相互作用の過程において、言語による解釈（意味づけ）が重要な役割を果たすと考えており、「人間は、ものごとが自分に対して持つ意味ののっとして、そのものごとに対して行為する」と定式化している。この見方は、従来までの相互作用に対する捉え方への批判でもある。ブルーマーによると、それまでの研究は、人々にある行動をとらせる要因を、物事そのもの（個人のパーソナリティや内的な衝動、または、文化的規範や相手の行為）

に求めてきたという。だが、そうした捉え方では、人間によってなされる解釈の過程を、等閑視することになる。ブルーマーは、人々が、自分の行おうとしていることに対して、言語（記号）を用いて意味を与え、同時に、反応する相手に、自分の解釈してほしい意味を指示していると考え。一方、反応する側は、相手の行為が自分にとって何を意味するのかを、言語（記号）を通して理解し、それに基づき反応を組み立てているという。つまり、人と人との相互作用過程における言語の重要性を確認しているのである。

2) 「構築主義」の特徴 相互作用のなかでの世界の構築

以上より、人々の経験は、言語によって構築されるということになる。すると、特定の記号体系のなかに生まれてくる人間は、既存の記号を用いて自らの経験を意味づけざるをえない存在だということになるだろう。つまり、人間は、言語による拘束のために、ある特定の行為を遂行するよう、条件づけられているのである⁷⁾。このように、相互作用における人々の経験は、言語により組織化され、言語こそが人々の相互作用行為を可能にしているということになる。

しかし、その一方で、パー（1997/2002:62）は、そのような言語による世界の構築が、「個人によって独力で成し遂げられることはありえない」と述べている。日常生活における人と人との言語的なやり取りのなかで、つまり、日常の具体的な状況のなかで、人々が記号に意味を与えることを通して、世界は生み出されるというのである。

ブルーマー（1991/1995:2）も同様に、「も

のごとの意味は、個人がその仲間と一緒に参加する社会的相互作用から導き出され、発生する」と考えている。世界の構築に参与する言語の意味が、物事そのもの（たとえば行為そのもの）にもともと内在するのではなく、相互作用の文脈のなかで形成され、規定されることを指摘している。

3) 「構築主義」の特徴 言語の可変性

パーによる構築主義は、第三に、言語（記号）を、人々の日常的な相互作用のなかでつねに構築されつづけるものとみなす。既述のように、選択の余地なく特定の言語（記号）のなかに生まれる人間は、自らの経験を特定の言語によって構造化し、意味づけなければならない。だが、構築主義は、必然的な様相をもつそうした分節化の過程を、「恣意的なもの」「他でもありえたもの」として捉えようとする。つまり、言語を、特定の時代や文化の所産として捉えようとするのである。この見方は、言語（記号）の可変性を示唆する。そして、言語を、「争いや葛藤の、そして潜在的な個人的および社会的変化の、場」（パー1997/2002:69）として見ることを可能にする。

この捉え方は、シンボリック相互作用論にも共通する。先述のブルーマー（1991/1995:2）は、「意味は、個人が、自分の出会ったものごとに対処するなかで、その個人が用いる解釈の過程によってあつかわれたり、修正されたりする」と記している⁸⁾。そこでは、人は、すでに確立された意味を単に適用するだけの存在ではないこと、言語によるその都度のやり取りのなかで、一方の呈示する記号に他方が異なる意味を与えたり、異なる記号を用いたりする可能

性があることを指摘している。

このような指摘を行う構築主義の意義について、述べておきたい。構築主義は、「言語は透明ではない」という掛け声のもと、世界の实体視を避けようとしてきた。だがそれは、ややもすると、人々の経験の構造化を、言語（記号）に過剰に還元させる危険性をもっている。言い換えれば、言語による既存の分節化を必然視するあまり、ふたたび世界を（たとえ社会的に構築されたとみなすとしても）閉じたものとして捉えかねないのである。だが、言語を特定の文化や時代に特有なもののみならずことによって、それらを相対化することが可能となる。さらに、記号による分節化（意味付与）が「他でもありえた」かもしれないこと、にもかかわらず、他でもないあの意味づけが「必然的なもの」「正当なもの」とみなされてきたことに対して、反省的に臨むことができるようになる。その結果として、何らかの権力の関与を疑う 特定の分節化が「必然的なもの」とみなされる背景には、特定の権力が関わっているのではないか、という形で ことも可能となるだろう。既述のような見方に基づくことによって、社会変革の可能性を理論に呼び込むことができるのである。

4) 言説と自己構築との関係 意味づけと主体化

上記のように、人間は、他者との日常的なやり取りの過程で、言語（記号）を用いながら世界を経験し、自らの行動を構造化していくのであった。ここでは、「自己」というものを、そうした構築される世界のうちの一つとして考えていきたい。

すると、自己は、もはや固有性や独立性を備えた自己完結的な実体（いわゆる「個人」）としては捉えられないことがわかってくる。なぜなら、それは、既存の言語によって、はじめて意味を与えられ構築されるものだからである。しかし、その一方で、自己は記号体系に還元しつくされる存在でもない。それは、他者との相互作用における言語使用（意味づけ）のなかで、その都度あるイメージ（一貫した意味のまとまり）として獲得され、また定義し直されるものである。人は、そうした意味づけを試行する過程で、特定のイメージにリアリティを感じ、そのイメージを自らのアイデンティティとして感知すると考えられる。また、自己は、その存在への承認を他者から得るため、獲得したイメージを、あるときは維持し、またあるときは拒否しようと言語的に争う存在でもある。

ところで、バー（1997/2002:74）によると、「言説」は次のように定義される。

何らかの仕方でもとまって、出来事特定のヴァージョンを生み出す一群の意味、メタファー、表象、イメージ、ストーリー、陳述、等々を指している。それは、一つの出来事（あるいは人、あるいは人びとの種類）について描写された特定の像、つまりそれないしそれらのある観点から表現する特定の仕方を指す。

この定義に従うと、自己とは、他者との相互作用の過程において用いられる文化的に利用可能な言説から構成されたもの、ということになる。換言すれば、人は、特定の言説を引用する（特定の言説に同一化する）ことによってイメージを獲得し、そのことによって、自己がまぎれもなく存在す

ることを認知していくものと考えられる。特定の言説に拘束され、また、言説をあらたな意味によって読み替える自己は、つねに何らかの言説に従属する (subject to) という意味で、「主体 (subject)」と呼ぶことができる。本稿では、この自己構築の過程を、「主体化」の過程と名づけたい。

5) 構築主義のもう一つの特徴

自己は、つねに、さまざまな種類の言説にさらされている。しかし、パーによると、ある特定の言説のみが、人々から「常識」「真理」として承認される傾向にあるという⁹⁾。そして、言説の真実性が高まれば高まるほど、人は、その引用によって獲得される自己のイメージを、あたかも言説を引用する前から、本来的に備えていたかのように感受するのである。たとえば、「女らしさ」「男らしさ」に関する言説は、その代表的なものと言えるだろう。

そこで、構築主義のもう一つの重要な特徴 (意義) を確認しておきたい。それは、言説を生み出す者にこそ、求められる認識である。人が支配的な言説に全面的に取り込まれる存在でないとすれば、人は、既存の支配的な言説によっては「語られざるもの」「はみ出してしまうもの」を経験しているはずである。そこで、既存の支配的な意味づけへの批判とともに、そうした異なる意味づけへの凝視も必要になるだろう。また、人は、支配的な言説を読み替えることもできる。語る者に求められるのは、そうした異なる自己の語りを差し出し、他者へと伝えていくことではないだろうか。自らも、言語により自己について語るなかで、世界 (自己) の構築に関与していることに自覚的

でなければならない。

4. 「異質性」に関する語りと主体化 言説の特徴

以上のような課題と方法論に基づき、本稿では、「みんなちがって、みんないい」という語りによって代表される言説に焦点をあてていきたい。それらは、「ちがい」をどのように捉えているのだろうか。また、それらの語りの人々によって反復され引用されるとき、人はどのような自己のイメージを抱く可能性をもっているのだろうか。次節にわたり検討していく。

1) 「みんなちがって、みんないい」における二つの意味づけ

「ちがい」に関する言説は、人々にどのような自己のイメージを喚起させうるのだろうか。それらの言説において、どのような意味づけが支配的であるのかを明らかにしながら、考察していく。「異質性」への気づきを促す今日のコミュニケーション研究や教育行政の語りには、ある共通点を見出すことができる。その共通点とは、自己を、次のような二つの志向性をもつべき存在として意味づけている、ということである。一つは、人々の間に存在する「ちがい」を積極的に際立たせ、「ちがい」を追い求めることを肯定するという志向性であり、もう一つは、一人ひとりの「ちがい」を前提とした上で、お互いを対等に認め合うという志向性である。

くしくも、金子の作品「みんなちがって、みんないい」も、自己というものを、このような二種類の志向性をもつべき存在として解釈していると考えられる。まず、「みんな

なちがって、(…)いい」という部分では、前者の志向性を備えた自己のイメージが語られている。この部分には、「固有性」「本来性」を称える意味づけがなされていると思われる。一方、「みんないい」という部分では、後者の志向性を備えた自己のイメージが語られている。この部分には、「相対性」「共感性」を称える意味づけがなされていると言える。

これら二つの支配的な意味づけを、今日の言説のなかにも見出すことができる。たとえば、「英語の国際化」や「日本人のコミュニケーション」に関する提言で著名な本名(1999:150-157)は、異文化交流にあたって、次のような注意を喚起する。すなわち、「文化的背景の異なる人々」と交流するときには、「相手の行動規範をその文化的背景で理解すると同時に、自分の行為を合理的に説明する営み」が重要になる。また、相手の文化(行動規範)と自分の文化(行動規範)をそれぞれに理解し、言葉により説明するためには、自他の比較や対照が必要である、と。(ただし、本名は、近年の生活や価値の多様化によって、同じ日本人どうしの間でも、お互いの行動規範を合理的に説明する姿勢が求められることも付言している。)この見解のなかには、まず、「固有性」「本来性」を称える意味づけを見出すことができる。なぜなら、それは、「文化的背景の異なる人々」の行動規範と、「日本人」のそれ(または、価値の異なる日本人どうしの行動規範)との「ちがい」を明らかにし、それぞれの特徴を追求することを求めているからである。一方で、異文化交流における双方向的で対等な理解を主張している点には、「相対性」「共感性」を称える意味づ

けを見出すことができる。

学校教育に関する指導指針を示した言説においても、同様な意味づけがなされている。たとえば、文部省による学習指導要領(1999:129)の外国語教科では、教材の取り上げ方について、次のような「配慮」が求められている。

ア：多様なものの見方や考え方を理解し、公正な判断力を養い豊かな心情を育てるのに役立つこと。イ：世界や我が国の生活や文化についての理解を深めるとともに、言語や文化に対する関心を高め、これらを尊重する態度を育てるのに役立つこと。ウ：広い視野から国際理解を深め、国際社会に生きる日本人としての自覚を高めるとともに、国際協調の精神を養うのに役立つこと。

このうち、「我が国」の生活や文化への理解と尊重を求める点、また、「日本人としての自覚」を求める点には、「固有性」「本来性」を称える意味づけが認められる。一方、「多様なものの見方や考え方を理解し、公正な判断力」を求める点、「国際協調の精神」を求める点には、「相対性」「共感性」を称える意味づけを見出すことができる。

2) 言説の特徴

上記より、今日の「異質性」に関する語りが、自己を、二つの志向性をもつべき存在として意味づけていることが明らかになってきた。これらの言説には、さらに次のような特徴がある。それらは、統一的で、より理想的な自己の形成を人々に促すためには、二つの志向性をうまく両立させる必要がある、と考えているのである。今日の「異質性」に関する語りが、人々の間で反復

「異質性」に関する一考察

され、引用されてきた背景には、こうした考え方への支持があったものと思われる。以下では、これらの言説に正当性が与えられてきた事情について検討していきたい。

青木（1988/1997a）は、戦後の日本社会における、「日本人の『自己認識』」に関する多数の言説を振り返っている。その分析から明らかになったことは、上記のように、二つの志向性を調和させながら自己の形成を促す語りが、これまでほとんど存在しなかった、ということである。言説の多くは、「固有性」「本来性」を称える意味づけに固執し、「相対性」「共感性」を称える意味づけを等閑視する傾向にあったという。その結果、繰り返されてきたのが、「鎖国論」「開国論」と名づけられる二種類の言説のせめぎ合いである。「鎖国論」とは、「日本の文化・社会の連続性を強調し、その中で『国際化』の問題を処理しようとする立場」である。この立場に立つ人々は、日本と外国との文化的相違を強調し、日本の「国際化」に批判的な態度を示す（たとえば、日本社会に混乱を招くとの理由から、外国人労働者の受け入れに反対するなど）という（青木1988/1997a:145）。一方、「開国論」とは、「現在のように『国際社会』の中で日本が外国との相互交流をしなければならない時代にあっては、制度や組織も『開放』して外国人を受け入れなくてはならないし、外国語と日本語との併用すらみとめなくてはならない面がある」と考える立場である。この立場に立つ人々は、「国際化」のためには、「自文化」のある程度の制限もやむをえないとみなす傾向にある、という（青木1988/1997a:145-146）。

西川（2001）も同様に、明治維新以降の

「国粹主義」「欧化主義」という二つの言説について言及している。両者は、いずれも、「相対性」「共感性」を称える意味づけを欠落させている点で共通している。そして、前者の「国粹主義」は、「日本人」「日本文化」の「固有性」「本来性」を肯定的に評価し、後者の「欧化主義」は、逆にそれらを否定的に評価する。西川によると、日本の近代化の過程では、両者が「対立葛藤」しながら、交互に人々の支持を得てきたという。たとえば、国粹主義の第一期（1890年前後）と第二期（1940年前後）には、多くの知識人が、行き過ぎた「欧化主義」から「国粹主義」へと転向しながら、特定のアイデンティティを獲得し、人々のアイデンティティ獲得と相俟って、日本社会が戦争へと巻き込まれていったことが、明らかにされている。

こうした歴史的な整理に従うと、今日の「異質性」に関する語りが、これまでの言説とは異なった方向性をもつものであることがわかってくる。その特徴は、以下の二点にまとめられるだろう。第一に、維新以来できなかった「相対性」「共感性」を称える意味づけを、自らの語りのなかに取り込もうとしている、ということ。第二に、あらたな解釈の実践により、「鎖国論」「国粹主義」と「開国論」「欧化主義」との対立葛藤の意義を失わせ、もはやどちらにも引き裂かれることのない統一的な自己（自らの絶対的な肯定にも否定にも陥らない自己）を構成しようとしている、ということである。

3）言説に正当性が与えられる理由

さて、岡（2000）は、そもそも「文化相対主義」が登場した当初のねらいを、「反・

自文化中心主義」と、「異なる価値観との対話の創造」にあった、と述べている。ところが、岡も危惧するように、今日では、「文化相対主義」の名のもとに、自文化中心主義的で、他者との対話を否認するような暴力が横行しているという。

たとえば、外国人へのテロ行為を重ねるイスラーム主義者は、自らの行為を、「西洋的価値観」対「イスラーム的価値観」の対立構図のなかで正当化する。そこでは、「自分たちには自分たち独自の価値観がある、これは自分たちの文化だから良いのだ、他文化の者に自分たちを批判する権利はない」（岡2000:295）という、一見相対的な言い訳が成立している。これに対して、「西洋的価値観」に含まれる者たちは、自らを、人命を尊ぶ「普遍的な人権主義」と捉え、「イスラーム（文化相対主義）」に対置させている。しかし、岡によると、いずれの側も、自らの価値観を普遍的なもののみならず、自文化中心主義的だという。また、両者とも、相手を対話不能な他者として捉える危険を冒しているという。

日本社会において展開された「鎖国論」「国粹主義」と「開国論」「欧化主義」との対立葛藤も、上記の構図と同形であることがわかる。なぜなら、「開国論」「欧化主義」が、「普遍的な西洋的価値観」との対比において見出された「特殊な日本的価値観」を、「特殊（固有）性」の名のもとに否定するのに対し、「鎖国論」「国粹主義」は、それを「西洋的価値観」を超えるような普遍性をもつものとして肯定しているからである。

岡の示す事例から、文化相対主義は、容易にその意義を失う危険にさらされていることが伺える。このような状況のなかで、

「固有性」「本来性」とともに、「相対性」「共感性」をも重視する今日的な語りは、本来的な「文化相対主義」を取り戻す試みとして、見る人々の目に映る。この期待感こそ、人々が、これらの語りに正当性を見出してきた理由である。

5. 「異質性」に関する語りと主体化問題の指摘

だが、今日の「異質性」に関する語りを、手放して本来的な（文化相対主義的な）語りへの復帰として受け止めることはできるのだろうか。本節では、それらの語りもつ問題点とくに自己の構成に及ぼす影響について の指摘に向けて論を進めていきたい。

1) 「固有性」「本来性」と「相対性」「共感性」の調和とは

これまでの検討から、「異質性」に関する語りは、その語りを受容する人々に、「固有性」「本来性」とともに、「相対性」「共感性」を志向するよう促していることがわかってきた。そこでは、「自分らしくあれ」という呼びかけと、「他者を尊重し、他者の声に耳を傾けよ」という呼びかけが同時になされ、両立させることが期待されている。しかし、この想定は、あまりにもナイーブなものではないだろうか。二つの志向性の両立が求められるとき、人は、果たして本来的な意味での文化相対主義的な自己を形成できるのだろうか。

この問題を考える上で、酒井（1996/1997）の「文化的差異」と「文化的種差」という二つの概念は導きになる。たとえば、泳ぐことのできる人とできない人とでは、お互

いの体験を、どれほど言葉を尽くして語っても了解し合えないことがある。酒井は、このような「体験の非共約性」による「ちがい」を、「文化的差異」と呼ぶ。文化的差異は、「未知の文化になじみのない者にとって了解不能のものとして現われる以上」(1996/1997:14) 既存の概念(言語)による記述は不可能となる。人間は、まず、こうした了解不能な差異に、日常的に出会っているというのである。これに対して、既存の概念によって記述の対象となりうる「ちがい」を、酒井は、「文化的種差」と呼ぶ。種差とは、「同じ一般性に包摂された二つの特殊性の間の相違」(同)として見出される「ちがい」のことである。

この点を踏まえると、これまでの「異質性」に関する語りに登場した「ちがい」は、すべて文化的種差と考えてよい。たとえば、金子が同じ存在物としての「小鳥」と「わたし」を、「空をとべる小鳥」と「空をとべないわたし」として区別したように、この語りにおける「ちがい」は、「同じ一般性に包摂された二つの特殊性の間の相違」である。同様に、「文化的背景の異なる人々」と「日本人」との間にあるとされる行動規範の「ちがい」も、言語化が目指されている点で、文化的種差と言える。

ところで、種差は、システム概念とも親和的である。類概念としての「システム」(たとえば、存在物全体)が、種概念としての「要素」(たとえば、「わたし」と「小鳥」と「すず」など)によって構成されていると想定すると、文化的種差とは、一つの自律的なシステムを構成する二つ以上の要素の間の相違、ということになる。言い換えれば、全体をまとまりあるシステムとして

捉えたいとき、人は、諸要素の間に種差を見出し、区別するということになる。このとき、一つひとつの要素は、お互いに他方を補完する特徴をもつよう、相互構成的に定義されている。「わたし」と「小鳥」を、「空をとべないわたし/空をとべる小鳥」、「地面をはやく走れるわたし/はやく走れない小鳥」と特徴づけているのは、その一例である。

さて、「異質性」に関する語りが、文化的種差としての「ちがい」を扱うなかで、「固有性」「本来性」と「相対性」「共感性」の調和はどのように達成されているだろうか。

本名(1999)や鍋倉(1997/1999)をはじめとする多くのコミュニケーション研究は、「自文化」と「他文化」の特徴(価値観や規則)の「ちがい」を、異文化摩擦やカルチャー・ショックの引き金や原因として捉えている。それらは、二つの文化の「ちがい」を公正に知ることができれば、摩擦をあらかじめ回避することができる、と考えているのである。「自文化」と「他文化」の特徴を正しく理解し、説明することの大切さを訴える背景には、こうした考え方が関わっている。

だが、この考え方には、論理的な飛躍がみられないだろうか。なぜなら、相互構成的に(したがって、相互補完的に)定義されたはずの諸要素が、いつの間にか、他の要素との関係から切り離され、明確な境界によって囲い込まれた独立した「文化」として捉えられているからである。また、文化的種差として見出されたはずの要素間の「ちがい」も、いつの間にか、独立した自己完結的な特徴をもつ文化と文化との「ちがい」として扱われている。摩擦の原因とし

での「ちがい」は、種差であったことが忘れられ、(あたかも、コミュニケーションがなされる前から、そこに存在していたかのよう)に実体視されているのである。

これらの言説は、「固有性」「本来性」と「相対性」「共感性」の二つの志向性の両立を、人々にたやすく求めてきた。また、それぞれの文化の特徴を、「固有性」「本来性」の探求の対象として差し出し、人々に「自分らしさ」を追い求めることを促してきた。だが、そうした促しは、以上のような論理的な飛躍を経ることによって、はじめて可能となることなのである。文化的種差を、自己完結的な文化と文化の「ちがい」として誤認することなくして、このような促しはできない。

2) 主体の構築

以上のような過程に無自覚なまま、「異質性」に関する言説は、二つの志向性の調和を人々に求めている。では、これらの言説を受容する人々に、どのような影響がもたらされるのだろうか。本稿では、人々の自己の形成において、二つの点で逆説的なことが生じるのではないかと考える。

心理学や精神医学の知識(語り)の普及とその影響に関する研究を参照しながら、一つ目の逆説について考察していきたい。森(2000:9)は、今日の日本社会を、「心理学や精神医学の知識や技法が多くの人々に受け入れられることによって、社会から個人の内面へと人々の関心が移行」した社会、として捉えている。森によると、心理学的な語りが人々に普及する背景には、語り手やそれを受容する人々に、ある共通した思いがあるからだという。すなわち、語りを

通して、自己理解や自己洞察の方法を身につけ、それによって、自分の抱える課題(たとえば、ストレスの解消や心理的安定の回復、こころの豊かさや自己実現の達成など)の実現を図ることができる、という思いである。たとえば、近年、能力主義を採用するようになった企業では、「個性の尊重」と「自己実現」がますます重視されている。こうした傾向のなか、就職活動をする大学生の間では、自分の「個性」を見極めるための「自己分析」がブームになっているという。

だが、心理学的な語りの浸透は、ほんとうに人々のこころの問題を和らげ、自己実現を助けてくれるのだろうか。森は、むしろ、人々の内面への関心の移行は、「自明視された社会的状況を問い直すことなく、適応できない自分や他者を過剰に責める」(2000:18)ことへとつながる、と考える。今日の社会的状況を支える中心的な規範を不問に付し、むしろ、自分や他者の、規範からのズレを厳しく非難するようになる、というのである。では、厳しくなった他者の視線を、人々は、どのようにして回避するのだろうか。そこでふたたび利用されるのが、心理学的な語りである。人々は、それらが伝える自己観察の方法を通して、他者に非難されないよう、自分の感情や振る舞いをコントロールし、規範を遵守する方法を学んでいくのである。

この分析から、心理学的な語り、一人ひとりの人間を、「個性」追求の対象として捉えていることが伺える。つまり、一人ひとりの人間を、自己完結的な特徴をもつ存在として、「固有性」「本来性」を志向すべき存在として捉えているのである。しかし、

「異質性」に関する一考察

また、逆説的なことも起こっている。それらの語り、人々を「個性」追求の対象とみなし、語りの語調を強めれば強めるほど、人々は、現状の社会システム（規範）を維持する一要素として、自己のコントロールへと向かうことになるからである。

以上の議論を参照すると、「異質性」に関する語りの問題点も明らかになってくるだろう。すなわち、「異質性」に関する語り、「固有性」「本来性」の追求を迫れば迫るほど、人は、相互構成的に見出された特徴を、あたかも「自分らしさ」を象徴する特徴であるかのように感受し、内面化することになるのである。そもそも自律的なシステムを維持するよう見出された相互補完的な特徴が、本来的な自己のイメージとして、捉えられることになる。ここには、「固有性」「本来性」追求のディレンマが覗いている。

このような形の自己形成として、もっとも典型的な事例が、日本文化論のなかで展開されている。日本文化論は、「われわれ日本人」の「固有性」「本来性」を、読む人々の「実感」を伴いながら追求していく。だが、そこに見出された「自分らしさ」とは、「アメリカ」などの国民共同体レベルの諸要素との間で形成された相互補完的な特徴にすぎない。このとき、既存の言語によって語ることでできないもの（つまり、文化的差異）は、排除されている。そのため、人々は、既存のシステムにおける支配的な意味によって、自己を定義しやすくなるのである。第2節でも触れたように、このような形の自己形成には、同一化の暴力が伴っている。

自己の形成における二つ目の逆説とは、「同時代性の否認」と呼ばれる事態である。

ファビアン（1983/2002:37-69）によると、「同時代性の否認」(the denial of coevalness)とは、これまで人類学によって採用されてきた二つの態度を指す。一つは、「文化の相対性を楯に、同時代性の問題を回避する」というものである。この態度は、それぞれの文化にはそれぞれ独自の時間が流れているとする、相対的・多数的な発想から生じている（この発想の典型として、ホールによる「ポリクロニックな時間」「モノクロニックな時間」という、並列的な時間の捉え方を挙げることができる）。だが、逆説的にも、このような文化相対主義的な発想は、結果的に、『それぞれの文化』を孤立した場所へと囲い込み、それが変化してきた歴史と変化してゆく可能性を封印して固定化することによって、対象社会を西洋近代社会と断絶した自己完結的な世界として設定（古谷1998:95）することへと向かっていったという。こうして、時間は、文化間をまたぐものではなく、自己完結的な文化内に閉じ込められたものとして捉えられるようになる。そして、二つの文化の間には、断絶と距離が見出されるようになる。もう一つの態度は、「(同時代性の問題を)過激な分類学的なアプローチを用いて無効にする」というものである。これは構造主義に典型的な態度であり、時間の存在そのものを無視しようとする。

近代の人類学が陥った時間への感覚は、今日の日本社会に住む人々にも無縁ではないだろう。一人ひとりの人間（または文化）を、自己完結的な存在、「固有性」「本来性」追求の対象として捉える傾向は、人々に、「同時代性の否認」と名づけられるような自己の形成を促していると考えられるからで

ある。そして、ここでも、「同時間性の否認」が、「相対性」「共感性」への一層の志向を促す流れのなかで、逆説的に起こっている。

第2節でも述べた「マジョリティ」と呼ばれる人々の躊躇は、その顕著な例であろう。今日では、もはや、「マイノリティ」と呼ばれる人々をあからさまに排除しようとする行為を見つけることは難しくなっている。むしろ、多くの人々は、相対的・多数的な発想のもと、荒立った行動をとることはない。だが、「当事者ではない」、「自分には語る資格がない」との理由から発言を謹む人々は、マイノリティと名乗る人々を、どこかで、自分たちとは異なる独自の時間に生きる人々として感受しているのではないだろうか。

自らを日本社会を構成するマジョリティ、またはマイノリティと捉える人々は、それぞれの自己のイメージを、これまで相互補完的に形成してきたと思われる。それにもかかわらず、人々は、自分たちが、同じ時間を共有しながら、相互に構成し合う存在であったことを忘却しているのである。今日、人々に求められることは、相対的・多数的な発想のもと、一人ひとりの「個性」を探ったり、追求したりすることではない。そうではなく、他者の構成に自己が関わっていること、自己の構成に他者が関わっていることを、あらためて認識することではないだろうか。そして、自分自身が、自己や他者の構成に関わるような、特定のポジションに立つ存在であること、また、その特定のポジションに立つ自分自身が、言説の引用により、特定の世界を構成してきたことを、自己批判的に受け止める必要がある。

6．おわりに

本稿は、金子みすゞの童謡を出発点に、「ちがい」や「異質性」というものの捉え方について検討してきた。今日では、日本社会を、同化を強要する社会として認識することが一般的である。そうしたなか、「ちがい」を認識し、尊重することを説く言説は、これまでも多数生み出されてきた。だが、「ちがい」を称揚する今日の傾向に、問題がないわけではない。そこで、本稿では、構築主義に基づきながら、コミュニケーション研究に代表される「異質性」に関する語りを、批判的に検討してきた。

さて、それらの言説は、自己をどのように語り、人々の自己の形成にどのような影響を与えてきただろうか。明らかになったことは、まず、多くの語りが、「固有性」「本来性」とともに、「相対性」「共感性」を同時に志向するよう、人々に促しているということである。また、語りのそうした姿勢は、それらの語りの正当性を根拠づける役割を果たしてきた。しかし、その一方で、それらの語りは、相互構成的に形成されたはずの自己を、いつの間にか、自己完結的なもの、「固有性」「本来性」の追求の対象としてみなすという誤認も行っていった。そのため、人々の間では、二つの点で、逆説的な自己の形成がなされることとなった。一つは、人々が、言説に従い「自分らしさ」を追求すればするほど、一層、システムの求める規範にとらわれてしまう、という逆説である。もう一つは、人々が、文化相対主義に基づき、各々の「固有性」「本来性」を追求すればするほど、「同時間性の否認」と名づけられるような自己の形成へと促さ

「異質性」に関する一考察

れる、という逆説である。

本稿の目的は、「ちがい」を称揚する今日の無防備な構えに対して、疑問を投げかけることにあった。そして、言説の分析を通して、無防備な構えによって、どのような自己（世界）の形成がなされるのかを検討してきた。これまでの分析を振り返ると、「ちがい」に関する語りには、次のような認識が欠けているのではないかと思われる。それは、自らの発言や語り、言説として機能するという、したがって、自らの発言や語り、人々の自己（世界）の形成に大きな影響を及ぼす可能性をもつということである。以上から、今後のコミュニケーション研究の課題も、見えてくるのではないだろうか。コミュニケーション研究は、眼前でコミュニケーションを行う人々のみを研究対象とするのではなく、自らの語りも、それに含めていかなければならないだろう。つまり、コミュニケーションをする人々と言説との関わりを広く視野に入れた上で、それらが世界をどのように維持し、また再構築していくのかを考察していく必要がある。

注

- 1) 金子みすゞ（1903 - 1930）は、山口県仙崎町（今の長門市）に生まれ、本名を金子テルという。20歳のとき、下関の書店で働きながら童謡を書きはじめ、はじめて投稿した作品が、雑誌『童謡』に掲載される。以降、さまざまな雑誌に数多くの作品を次々と発表した。西條八十に「わかい童謡詩人の中の巨星」と評されたが、26歳のとき、自ら命を絶った。
- 2) 身近に「異質な人々」が存在するという気づきは、一つには、日常生活における「外国人」との関わり

りの増加によって、もたらされている。「在日外国人」との関わり増加は、日本をめぐる国際環境の変化に負うところが大きい。青木（1988/1997b: 109）も指摘するように、日本が世界経済の中心の一つとして認識され、経済摩擦や円高などにより、日本企業および日本人の海外進出が飛躍的に増え、さらに、労働市場としての日本への関心が高まり、仕事を求めて日本へ来る外国人が増えたことが、大きな要因になっているものと考えられる。ことに、1990年の出入国管理及び難民認定法の改正は、言語的・文化的な「ちがい」に気づきやすい多くの「日系人」との日常的な触れ合いをもたらし、（それまでも、日本社会には、いわゆる「非日系人」としての「外国人」が存在していたにもかかわらず）人々の「ちがい」への気づきを、一気に高めたと思われる。また、「異質な人々」への気づきは、人々の意識の変化とも関わる問題である。小熊（2002/2003: 551-597）によると、国内の地方格差の縮小した高度経済成長期（1960年代から1970年代前半）には、日本を古代から続く「単一民族国家」とみなす論調が強まったという。ところが、近代化による弊害（公害問題・土着共同体の崩壊など）に関心の集まった1970年代後半には、「原始共産制」を実現していたとされるアイヌや沖縄などマイノリティの存在が強調され、「単一民族国家」という見解も、批判されるようになったという。一方、「在日外国人」の存在への気づきとともに、「日本人」の内部に存在する「ちがい」に対しても、目が向けられるようになってきた。「日本人」と「外国人」の間にのみ文化的な「ちがい」を見出すこれまでの捉え方が、改められるようになってきたのである。その一例として、「帰国子女」と呼ばれる海外滞在経験者に対する、日本の学校の対応の変化をあげることができる。

- 3) 中根（1972/1997）は、早い時期より、「一体感」

と「同質性」を前提とした日本人のコミュニケーションのあり方に、批判の目を向けてきた。その問題点とは、一言で述べれば、「日本人の異質を認めない連続の思想」(1972/1997:119)に求められるという。すでによく知られるように、中根(1967/1999)は、日本人の人間関係を、情的で全面的な集団参加の求められる「タテ」の関係として特徴づけている。こうした傾向をもつ日本人が、外国人と積極的な関係を築かなければならないとき、どのような関わりをもつというのであろうか。中根によると、自分にとって親しい、または親しくなりたい(と主観的に判断した)人に対しては、たとえ相手が外国人であっても、「人間はみな同じなんだ、誠意をもってすれば通ずる」といった、感情的で未分化な関わりを押しつげがなされるというのである。これに対して、中根は、「異質であるという認識にたつてはじめて相手を理解しようという努力も払われるのである」(1972/1997:120)と警告し、相手との「ちがひ」を考慮する必要性を説いている。

4) 代表的な論者として、西川(2001)、酒井(1996/1997)、戴(1999/2001)、杉本・ロス(1995/2002)、吉野(1997)、姜(1996/2001)などを参照。

5) 国民国家論が飽きられた理由として、上野(2001:470)は次の点を指摘している。一つは、「『国民国家』論が説明能力を持てば持つほど、『何でも国民国家』という『一つの結論』が用意されていると見なされるようになった」ことである。もう一つは、「国民国家を相対化するための理論であったはずのものが、かえって国民国家の拘束力の大きさを証明する結果になり、『出口なし』の印象を与えるという逆効果を持つに至った」ことである、という。

6) 「欺瞞的な振る舞い」とは、たとえば、「(直接の)当事者でもないのに、あたかも自分の問題である

かのように得々として語ることで、自分を特権化するばかりか、自分の『犯罪』をも免責してしまうような態度」(稲賀2000:7)のことを指している。

7) この点について、パー(1997/2002:7)は、次のような例によって説明している。「禁酒運動以前、酔っぱらいは自分の行動に完全に責任をもつことができ、したがって非難に値すると見られていた。それゆえ、彼らに対する典型的な対応は投獄であった。しかしながらその後、酒浸りを犯罪と見ることから、それを病気、一種の嗜癖と考えるようになってきた。(中略)このような酒浸りの理解にふさわしい社会的行為は、投獄ではなく、医学的および心理的治療である。」

8) ブルーマーによるこの言及のため、シンボリック相互作用論は、ときに「主体主義的な理論」として批判される傾向にある。そうした見方に対する反論としては、片桐(2000/2003)を参照のこと。

9) パーによると、特定の言説が「真理」「常識」として流布し広く承認される背景には、その社会において相対的に権力を有する集団の利益が絡んでいるという。

参考文献

- 青木保.1988/1997a.『「日本文化論」の変容 - 戦後日本の文化とアイデンティティー』中央公論社.
- 青木保.1988/1997b.『文化の否定性』中央公論社.
- パー、V.(田中一彦訳).1997/2002.『社会的構築主義への招待』川島書店.
- ブルーマー、H.(後藤将之訳).1991/1995.『シンボリック相互作用論』勁草書房.
- Fabian, Johannes. 1983/2002. *Time and the Other*. New York:Columbia University Press.
- 早坂暁.2003.「大人になっても豊かな空想力」『読賣新聞』2003年11月3日.
- 本名信行.1999.『アジアをつなぐ英語』アルク.
- 古谷嘉章.1998.「異種混淆の近代と人類学」『現代思

「異質性」に関する一考察

想』6月号:92-105.

屋大学出版社.

稲賀繁美.2000.「ナウシカの慰め」稲賀繁美(編)『異文化理解の倫理にむけて』名古屋大学出版社:1-16.

姜尚中.1996/2001.『オリエンタリズムの彼方へ』岩波書店.

金子みすゞ(矢崎節夫選)1984/2003.『金子みすゞ童謡集 わたしと小鳥とすずと』JULA出版局.

片桐雅隆.2000/2003.『自己と「語り」の社会学-構築主義的展開』世界思想社.

森真一.2000.『自己コントロールの檻』講談社選書メチエ.

文部省.1999/2001.『高等学校学習指導要領』財務省印刷局.

鍋倉健悦.1997/1999.『異文化間コミュニケーション入門』丸善ライブラリー.

中根千枝.1967/1999.『タテ社会の人間関係』講談社現代新書.

中根千枝.1972/1997.『適応の条件』講談社現代新書.

西川長夫.2001.『増補 国境の越え方 国民国家論序説』平凡社ライブラリー.

小熊英二.2002/2003.『<民主>と<愛国>』新曜社.

岡真理.2000.『「他文化理解」と「暴力」のあいだで』稲賀繁美(編)『異文化理解の倫理にむけて』名古屋大学出版社:287-306.

酒井直樹.1996/1997.『序論-ナショナリティと母(国)語の政治-』酒井直樹・ブレット・ド・バリ-・伊豫谷登士翁(編)『ナショナリティの脱構築』柏書房:9-53.

杉本良夫・ロス・マオア.1995/2002.『日本人論の方程式』ちくま学芸文庫.

戴エイカ.1999/2001.『多文化主義とディアスポラ』明石書店.

上野千鶴子.2001.『解説-『国民国家』論の功と罪』西川長夫『増補 国境の越え方 国民国家論序説』平凡社ライブラリー:461-477.

吉野耕作.1997.『文化ナショナリズムの社会学』名古